

1

がんを疑う 症状, 徴候

徳田安春

JCHO 本部 総合診療 顧問 / 総合診療医学教育研究所 代表

Point 1 **がんが症候を起こす機序を説明できる。**

Point 2 **がんを疑う主要症候を説明できる。**

Point 3 **がんを疑う準主要症候を説明できる。**

はじめに

人口の超高齢化により、がん患者の死亡数が増えている。全がんにおける年齢調整死亡率でみると近年は減少傾向にあるが、超高齢化で絶対数は爆発的に増えており、日本人の死因の1位となっている。

がんが見つかる過程は2通りある。1つは無症状のうちに検診で見つかるものである。もう1つは症状が出現し、医療機関を受診して診断されるものである。前者はスクリーニングであり、後者は診断である。前者については第2章で取り扱うため、ここでは後者のがんの診断についての症状と徴候、すなわち「症候」について述べる。

1. がんが症候を起こす機序

がんが症候を起こす機序を**表1**に示す。

通過障害

まず、腫瘍圧迫による通過障害がある。例としては次のようなものがある。

- 肺がんによる気管支閉塞・狭窄による気管支肺炎（閉塞性肺炎）・無気肺
- 食道がんによる食道の狭窄・閉塞による嚥下困難・嚥下痛
- 胃がんによる蠕動運動障害（完全閉塞はまれ）による食後早期膨満感・食欲不振・悪心
- 膵頭部がん・胆管がんによる総胆管の狭窄による閉塞性黄疸
- 尿路系がんによる尿路系狭窄・閉塞による水腎・尿管管症と、それに伴う腰部不快感・尿路感染症・尿毒症（両側尿路系閉塞）

また、大腸がんにより大腸内腔の狭窄・径短縮をきたすことで、排便習慣の変化・便秘・下痢・腹痛などが起こる。ただし、盲腸上行結腸の大腸がんは通過障害をきたしにくいことに注意する。その理由は、盲腸上行結腸は管腔径が大きく、内容物の水分量も多いからである。

表1 がんが症候を起こす機序

1	腫瘍の圧迫による通過障害
2	腫瘍の圧迫による機能障害
3	上皮の潰瘍形成による出血
4	腫瘍の湿潤による疼痛
5	体重減少
6	胸水・腹水
7	管腔壁への湿潤による穿孔
8	原因不明の発熱
9	内分泌学的異常症候
10	腫瘍随伴症候群

前立腺がんによる尿道狭窄では、排尿困難・夜尿・尿失禁などを起こす。

膀胱がんでは、排尿困難というよりは排尿習慣変化をきたしやすい。

機能障害

腫瘍の圧迫による機能障害には、脳腫瘍（原発性または転移性のものがある）による中枢神経機能障害（病変部位に依存する）などがある。これによる症状としては、けいれんや運動・感覚・協調運動障害、認知障害、人格変化がある。また、甲状腺腫瘍による正常組織の圧迫で、非顕性甲状腺機能低下症を起こす。

出血

上皮への潰瘍形成による出血には、次のようなものがある。肺がんで気管支粘膜への潰瘍ができると血痰・咯血をきたす。また、大腸がんで大腸粘膜への潰瘍ができると血便・鉄欠乏性貧血をきたす。上述したように、盲腸・上行結腸のがんでは、通過障害をきたしにくいいため、便秘や腸閉塞をきたすことは少なく、しばしば「貧血のみ」を呈する。膀胱がんや腎がんで尿上皮の潰瘍形成があると、血尿をきたす。前立腺がんで精管上皮の潰瘍形成があると血精液症をきたす。子宮の体がんや頸がんでそれぞれ子宮粘膜や頸部上皮の潰瘍形成が起こると不正性器出血をきたす。子宮頸がんでは、性交時出血をきたすことがある。

疼痛

腫瘍の浸潤による疼痛には、骨髄腫・転移性骨腫瘍によ

る腫瘍の骨髄・骨浸潤で骨痛をきたすものがある。この場合は、痛みの程度はさまざまで、軽度のこともある。

体重減少

原因不明の意図しない体重減少では、がんの可能性を常に考慮する。体重の5%以上または5 kg以上の体重減少が1～6か月の間に起こると有意である。体重減少に、倦怠感・易疲労感を合併する場合は可能性が高い。

胸水・腹水

胸水貯留ががんの徴候であることがある。とくに、肺がん（原発性・転移性）や悪性中皮腫に注意する。悪性胸水の貯留による症状としては、胸部不快感や呼吸困難、臥位で胸部症状が増悪する、などがある。一般的に、胸水穿刺結果が滲出性でリンパ球優位の胸水であればまず、「結核」または「**悪性胸水**」を考える。

腹水もがんの徴候であることがある。とくに、卵巣がん・膵がん・消化器がん・肝がん・悪性中皮腫などに注意する。悪性腹水の貯留による症状としては、腹囲の増加や腹部不快感、便秘、体重増加などがある。

穿孔

がんの浸潤による穿孔・瘻孔もある。肺がんによる気胸により、突然発症の胸痛・呼吸困難、あるいは気管食道瘻による食事時の咳・呼吸困難・肺炎などが起こりうる。大腸がんによる大腸穿孔は重篤な腹膜炎（急性腹症）をきたす。まれに、胃がんによる胃・横行結腸瘻で食直後の下痢をきたすことがある。

原因不明の発熱

3週間以上に及ぶ原因不明の発熱（不明熱）では、がんの可能性も考慮する。最近では画像検査が発達してきており、不明熱という基準を満たすものとしては、悪性リンパ腫や